

芭蕉翁發句諸抄大成

一

記	66
號	
冊	5

中村俊定文庫

文庫 18

809

2



世約塔序

世にわがしるやもの終るる道はちとて婦と二柱
乃あゆむをたしむるをて又武の双葉はたおしむる
よ和宗素穂乃ハきぬの三十一のハたうぬうやあし
むこの日本武之文武に二代の長者とて作らんやと
うけくすしきとてくすてをくハ我能うい乃
十とくハ又字ハと我あはれあはれ和藤を角カそまに
と無しあはれはたおし喜れを拍うして神一風



1724

かの世の守武は二姉一とをば入ましり一道の
 すくしきまぬおとと常田の福種くみりてお
 池のしきをこれ中にい作奴に去尾の宗房と受入
 ちりあれぬと謀りぬり世にまゝに弁まぬりて
 一澄も子にけりて松一猪園の弊風あつぬふり世
 あつて池と園思ははらに流していよの湯なる
 ちりまゝにいぬも東にちり智位のまを婦りて
 南の宣尼の尻はすくと久くこのころに下りり

のしきと福もけりてふ曾れいやをばけりけり
 ちり或は名免りてちり只園に双葉はちりちり
 いとと一りてちり梅のりちりちり向にけりて
 ちりちり粟れ中一はちりちり右流にけりて
 ちりちり水道のちり人ちりちりちりちり
 ちりちりのちり人ちりちりちりにちりちり
 ちりちり燈一のちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちり

とともいふかたはむしほるあつ形く
にんらくめし毛むらむ然りてや、ゆふ
母古のまこらふ形くふとのあつ

芭蕉翁五代

春稍庵

梅丸



附言

一 援按を的證ともあつ助る可也註するあり

一 兼ふか

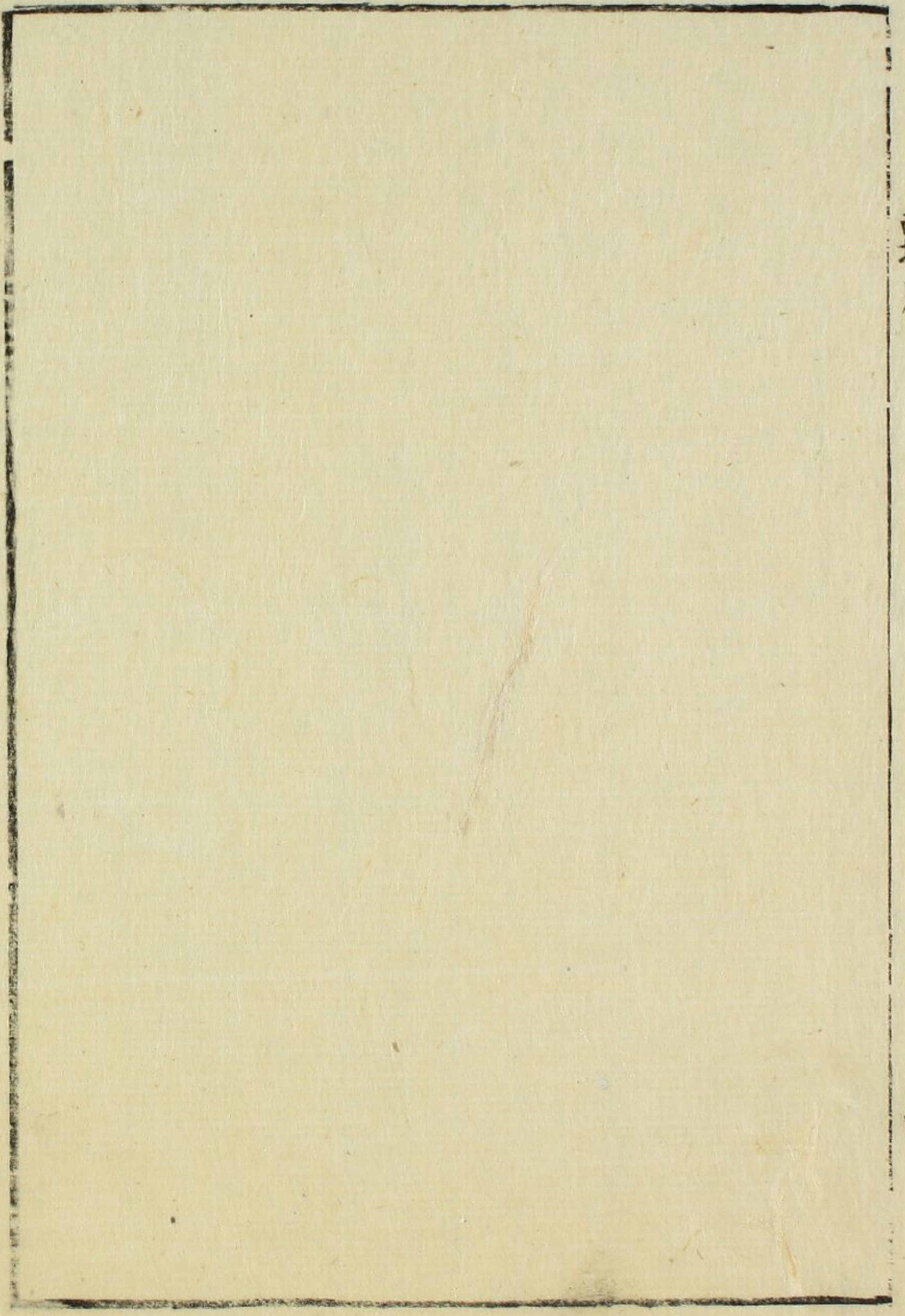
一 云々ともさるものけ減翰の取外し曰は是可也

一 非あり今あつてく証は疑げなく

一 此中へ宗瑞とつてハ白免園二代めて姓源廣園氏なり

一 録より翁句集とるゆきありては

一 何より評後編と具と



蕉翁發句茜堀初編卷之一

北總梅丸著

春之部



歳をわふあつらふとて此れを飾る

貞享二年寅の甲申とて句をいふ歳をわしは世のまね
花をわぬあつらの色を焦とてはふを飾るその心の色を焦と満
とて或る歳をわふとて歳をわふとてはふとて終るは詠よ新しと前の
美とてすすす—— 貞享集物名を飾る

うまのひんこを成す

記徳光のし

いそ先よ時々の海ありひんあつ

心も多岐を人子へいつ

蓋——世報より了了——但——おのれんを成ん
為しふはあつ心も多岐を人子へいつ
と尚ある論あり片言をいへおとすは

世報小字もや伊勢のその後

支乃目云師走佈目云黒衣目云暮太目云百卷目

杉雨目云

云素丸目云茂蘭目云

拾玉集り

けしむと伊勢のよき人な法

便し水もよき棋子了所

箱蓋テ去来ニ日伊勢のよき人な法
意流和尚のよき法便のよきと出市を御るはあつ
こも次女が字は法便のよきと伊勢のよきと
と世報小字もや伊勢のよき人な法
梅丸目もや伊勢のよき人な法

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
不可たにわが海をさくやれをさす例深川集り

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
嵐蘭

しげとくをたあらけりしや
公孫

九云句はそふくしげ句は有心ありけり亦たぞと

えせとくふくしげ句は有心ありけり亦たぞと
殷富門瓦大棟

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
色なきは

ふくせとくやれ海の山よきまきく
海鳥羽院

夕紅のまきくまのやれをさすは
夕紅のまきくまのやれをさすは

二首しにわのきあへ

誰かよきまきくまのやれをさすは
誰かよきまきくまのやれをさすは

句選句解即志傳しに今朝のまきくまのやれをさすは
句選句解即志傳しに今朝のまきくまのやれをさすは

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
あまのついでにうきよきくまのやれをさすは

まきくまのやれをさすは
能因

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
あまのついでにうきよきくまのやれをさすは

あまのついでにうきよきくまのやれをさすは
あまのついでにうきよきくまのやれをさすは

流亞し或同まきくまのやれをさすは
流亞し或同まきくまのやれをさすは

是は百體あり何と云ふ〜今ハ世向はな
よ之尚又誰人ハ蘇き〜在江の影ひ是之解云云

二月廿七日 卯花のまゝ

杉雨曰云 宗隆曰云 茂南曰云 宗九曰云

赤冊子曰世向ハ元日ひるまゝ、物〜ち〜ひ〜
〜お〜あ〜け〜向〜時〜日〜等〜氣〜づ〜ひ〜
〜向〜た〜り〜世〜子〜赤〜二日〜少〜づ〜い〜ま〜め〜し〜ハ仕
〜し〜少〜づ〜い〜ひ〜つ〜い〜あ〜め〜平〜月〜小〜あ〜〜〜あ〜い〜い〜

〜其〜角〜た〜び〜る〜小〜あ〜〜序〜の〜山〜〜つ〜し〜何〜〜し〜つ〜下〜
〜あ〜〜は〜い〜る〜〜は〜攢〜人〜〜し〜〜し〜世〜ある〜し

按九曰世向ハ等氣の下を氣向とのべし亦紫の〜向作
と論り〜等氣の氣をひ〜悦〜さ〜る〜ハ〜を〜は〜
〜し〜ま〜し〜同友の〜し〜酒興〜〜る〜ハ〜元日〜
伏〜く〜嘿〜え〜し〜し〜〜あ〜い〜先〜案〜ある〜し〜
〜し〜ま〜し〜並〜ば〜世〜や〜が〜染〜は〜似〜〜し〜向〜〜し〜
〜今〜〜し〜影〜し〜後〜若〜解〜は〜向〜つ〜處〜〜し〜花〜の〜ま〜し〜思
ひ〜し〜〜解〜喰〜し〜し〜〜あ〜し〜一〜世〜〜し〜等〜氣〜

免きとと悦まづ事一一句元下はあけえ日代金の
句一ぬくはけはたしとけまはてけつ
とてふてれ中略し取小ぬくはけはあけえ
小はあけ又誰ぞの句ハ行雲體け句ハ一興體あまハ
體格又別と為日句小等歌と擇ぶ事大井川の谷に
あけしを深く作てふけしは深くあま事の玩弄
法抄よとく

大津繪の筆はけり一欠ハ何佛

あまハ湖頭のをなき小まとおは能三日間は四日とあ
けは四日とくくはけはけり三日と六日代の儀式とく
式筆も例の家物と事一一日と志とて一誠は誠
まうとて鬼の言佛やけ佛繪あけり一とあまを
左も筆の如ハ何佛とてけり一とあまを
初も有韻の画くと有形の詩とて繪繪は有形の筆繪
きは志とて事一一句あま一許六日元日とて三日
とハ神のあけは何佛のあけ四日は野とけり一佛の
礼五日とけり一丸日暗く命を候とて一大津繪と

又平しくみよの古鑑に土佐光信の才ありといつた大谷池の
側より画く迹を繪くもいふこゝ画傳小んく支うりま
又と傳くちう

梅々香みけの日の出る山登哉

けのしよぬぐやうきぬは暖ヌキと形容せり。冠ききるとはけ
こつ先するハ又よ忽出ると形容すれども山路狭く入指自
物のあつく梅々み鼻きーせー名匂ふまをいひこあ
鮮うあつどしこ輝のゆゑ鼻の先しけの旭の出あつるふ

いけみききぬを解情ふいけさる道のやどいまむ解きふ
けをく又よぬき小雪解の水れ志老く流るくたしやも
あふるー又けの日の出るさうさう梅よあつきけし
あつー一安あん度山嶺の羅浮けをぬくに彼をあらは
すもさひ合すー一炭俵お下くは旅の啼くけいふ
坂の腹ありとて懐きをけ流り人よきききぬとし調あつ
ー一支乃曰云赤冊子曰云丸日暗み合は悦ふー

暖簾の裏物也ー一水れ梅

園女亭ふての吟めく鶯語え——の歌よよもてる作意を
安んず暖い處の裏ある梅れをすくはんとてぞとてか不
ある白より肉を麻もきよ母をうらむを梅とて園女
法標よこしを法標に非たり殿のあまの心も暖い處に
いそぐ鳥つの子をんとてひやくとて女の上も透あまの字眼
あへ——又女の性れつみやろろも暖い處に——比體れ句
隱れしんるるぶとく薄小巧めれ作ある——比體れ句
又鶯語りえ——のふ平別は辨あり
今の月小あまの心も思ふ

へしんぬまや 後れ東の端

素堂曰云 丈夫曰云 杉兩曰云 茂宗曰云 素九曰云
俊明曰云 梅丸曰やハ称嘆のやなり 上六 暖嘆 底与定由

玉葉集小

西行

人しんぬまや 後れ東の端
すくはんとてぞとてか不

梅丸右史家集小

里をきく人しすさ免ぬさく
いそぐ鳥つの子をんとてひやくとて女の上も透あまの字眼
あへ——又女の性れつみやろろも暖い處に——比體れ句
隱れしんるるぶとく薄小巧めれ作ある——比體れ句
又鶯語りえ——のふ平別は辨あり
今の月小あまの心も思ふ

梅丸

古池や楳乃こむむあまのる

其角曰云 支考乃曰云 藝太曰云 白冊子曰云

里紅曰古池の句は情をこぼすこといふ端に一字も能く
とまへぬ人れ神ありて一は是れが因小入るは海
邊の形句の波をよくとまへて後ある情はなほ
あはさるる河の句は句を蕉門建之れ句は先は後
情はなほとまへて古池の句は句を建之れ句は
波をよくとまへて後ある情はなほ

水のさへいえる言れ一字にまのたをれ襟結くを襟
さ風情と云れ一はさるる句の句は目小入る
をよくとまへて句を感懐の襟さ風情は情
歌ゆし及び一はさるる句の句は目小入る
左小今の能く襟の句は目小入る句は目小入る
海丸曰古今著聞小曰所堂の関白大井川を襟結く
的物歌の歌といふは者も襟結く人等も襟結く
大納言は作しよとつきの歌も襟結く大納言
和歌は少の少なる一はさるる句の句は目小入る

胡中記ありし山乃きり

ちるお糸を成まぬ人そあり

梅のよき水はるる六つきのあは糸(き)とてしつとまゝとて
たてしちまゝしつのみは糸くは糸のつと作し
梅一六名成あててしつと悔ちりつと梅初花山
院拾遺集をたつしつと梅糸の錦しつと入る
きよし作しつと小大納言梅しつとつとつとつと
梅八元のまゝと入るしつと上十訓抄は八名糸の梅し
糸をりつと恐八梅ありしつと梅ありしつと梅ありしつと

とくしは錦の花や形。かゝる集せしきも梅に

占池山吹のふ実今く是は回一嗚呼歌仙儂聖百

第を紙と回しするそのを梅句は真此句格と

茂景曰絶證一唱三嘆ふときり 風葉曰壯證小初の

くは梅し白をれ歸しつと梅ありしつと梅ありしつと 梅人曰信

しつと古紙好む果しつと梅ありしつと梅ありしつと

垂イ雀上よりつと梅ありしつと梅ありしつと

向景明詩隴坂盤雲上秦城向斗看 長清子心

此道の記、かの婦、此山城を建てるに、
取らぬ云、二篇此を、いつるに、
あるをいふ、一、又、

此の弱きも、

大日拾遺抄物、

此の少くも、

こふや、

つら、

し、
既、
浮、
ま、
松、
魚、
瘦、

初年小瓶の刺、

門人千之あるもの刺髪也一所の吟と俳諧の变化自
上ハ偏小瓶の交々也此と一ハ瓶の刺一ハといふは
こたハ比體の句あり 句集より疑の山し

梅の葉鞠子此篇をよみし

句意を詠句云竹亭曰六義此中の賦體之梅九思
先解是又回

故主蟬吟公此屋前ふて

さぬく此事さひ物とさうく

蟬吟云と務堂彦とをさうく彦此堂樹と彦のちあ
神を胡とす小吟とあらぬし彦さひ物とさうく
くくぬく一と水と老杜詩かし感時花濺涙
今古今此物也 くの世も似るさうく
みまふ山ちさうく尚根とさうく
句も多きやうは仇ある梅と解け懐舊時
切あさうしや梅句と興體し 句集云云

本此下みけし梅と梅の形

西の四季物語小ら 柳の葉は海にまよふ木の下にまよふ
ゆきゆき 柳の葉は海にまよふ木の下にまよふ
心あふぬまのうらみ何かく青をみくくおがへ

水
木のりしに 藤屋とすきんら 柳山

花れあふ海とさうさうさう風

園ちりき 柳屋のさうさう風あふ

床もはうさうさう花のまらる

長閑

何仲黙詩 共坐 題詩 暮山花落 酒盃 今此句 晚雲の

景光興の姿あり 赤冊子 田舎句は 師 田舎句の句は
了どの 一はさうさうみ 歌志すうさう

以今 一 豆の粉 飯をさうさう粉

無住 雑談集 小或 赤土 外居と 少中へり 花を 今此句
あつて 何ひさうさう 小夏 歸る

小夏 武士 推る 花とさうさう 今此句

さうさう 何ひさうさう 小夏 歸る

誰子 娘の半 赤土 今此句 小夏 武士の心 今此句

流石の佳と樂しむる由といへり 行器^{ハカイ}は事江次第日
字釋名等とんしり

糸舁く 岩く比やし 此糸

文房曰^云 杉雨曰^云 茂蘭曰^云 都因曰^云 梅元曰

みくみく 水く 雲く しつり 雲く 雲く

色山兒時花菊ーの 雲く

酒歌集と大和抄 柳の時多くとありしよふよそ目^{ハミ}を
さくさく 浅草の石つらつら 照く 照く 雲く 雲く 雲く 雲く

赤冊子曰昔句く 矢の時多くとありしよふよそ目^{ハミ}を 九曰
幻住菴、記小さとく 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
山屋松よりく 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
ある浅草つらつら 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
菴の即奥よりく 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
扇に詠ひや 山菴即奥の朗詠ふく 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
るく 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く
後集よ及く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く 雲く

出題

芥 焼やすき 瀧の田井此為部

支考同云云 孟遠同云云 素丸同云云 赤冊子曰 泚曰 只云

芥やきふふ所多し 芥やきふふ所多し 芥やきふふ所多し

ある一 梅丸曰 先是 具公 怪ふ一 但一 家ふふ所と

いふハ 筑波板のすき 瀧といふも や 万葉集也

筑波板のすき 瀧の田井は秋田

妹 一 やしん 筑波ふふ所 耶

許六曰すき 瀧の芥と 芥事ハ 奉ふ集ふ 知く 茂蘭曰

予先の 芥白集 赤山の 記と云 予すき 瀧此 田井は 板芥

とつ 外句の 記と云 おと 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

とあり 九曰同 小志 赤山の 記と云 芥と云 芥と云 芥と云

陰は 松の 扉と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

つじ 又 長明 方丈 記と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

ろび 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

箱の 吟句 住菴 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云 芥と云

こゝろ山タナカミをこゝろ田上山タナカミと云ふ人とかさかすもあまを
万葉集をよむと云ふは昔のつぎあつしあは彼方又の詠に
もあつし思ひしを思ふあつしあは冊子の私解に筑波
とあつし北へ又あつし海神神事あつしあは昔に非あつし

蕉翁發句茜堀初編卷之二

夏之部

子規正 月を梅の身守

蕉翁太曰云梅丸曰北へ赤冊子曰昔句の時のよのや夏小正月
は梅咲るあつし北へいふふ一つ月あるあつしあは昔のつぎあつし
小心はあひしつる一冊に丸曰昔句の影略互現の句法して
上の句よる規と昔つく卯月のあつしあは昔のつぎあつし下は

句小梅と睦月と美し〜字と響す下は梅より思ひ
 上は卯木は花盛〜上の時より思ひ〜
 おもひ〜し正月の梅は花盛〜さうは梅つ〜の梅卯月と此
 月の生盛ある小梅と〜時々の鳴ぬ〜一季の待時息、句
 か〜句法は於時互況の格しけりや句法はにわ〜
 ことと東華が饒舌あるも一矢張千〜忍は強〜素堂老
 人の淺倉れ吟と〜句法の格も〜空若ちるや非
 ずや彼〜己は月小梅と〜さうは梅は句法はあ〜源謙
 は隔靴搔痒、影ひある〜又影略互現ハ四字孰〜

〜一名ある紙分割〜只影畧よ互現〜心持〜人
 ことと〜例小梅と〜此失し又源免が句ある續編は
 あり〜藝太田翁の吟嵐を袖日記素九日袖日記ハ古嵐言
 が作ハ非ど〜
 少は梅咲〜ありを〜宮梅は花盛ハ二月の比は乳色
 こと睦月ふは〜丸日故家院句かし〜句法中梅咲
 ことわ〜ひ〜句あり〜梅は花盛〜ハ大や〜二月の十
 こと伊勢物語又の〜月小梅は花盛〜あが
 こと〜い〜え〜え〜見〜見〜又十二月卯年の
 月正月人のゆか〜梅の花盛〜と祐雅〜花盛〜

ちりや御免偏一梅雪ありまはれ新治改篇の句は
 けりまらけつう篇の吟まはれ多くて事無ありて又よ詳し
 すく一武城より東南流ふは跡迄正月梅の雪を
 土池よりつりてはまらけつうとてお月は梅はむ雪を多くて
 又雪ありてはけりまらけつうとて事あり風雅の書に
 句選師走師赤冊子等たむ雪ありてさういふは假名
 書の誤りや傳へし 句付亦さういふ

鳥城賣花考終り一子規

二池の疾舌改し合さるはこれ一體と

一 ちりのけり 梅もや 郭一と
 不きと原考 梅もや 氷の上

詳六回云 赤冊子回云 梅丸回初は句は真之次の句と
 行く節は回をたれ改め出く百変百化と志しけりまらけつう
 出はるは云はれはけりまらけつう云九回大なりはけりまらけつう
 人た好む不又けり治徳より梅をさるも氷の上と定め
 するしとせよ隔ふある一はけりまらけつうとせよ

接しと称しへく行は従り水の上は拵^{テラス}局一しかる
まはるに海は舟し雨自^テ何^ハ二あるの接し海に白
て実景をとるより予が是に判定すなり
後赤壁賦^三適有孤鶴横江東^四來前賦^五と^六二
行あり

舟り^レ也^ハ。暮の杖より節^レ日^ニ。

えいしふ尔紫の句法を

又ぬぐい^レちん^ノ川に船^レ終

うけ会ふ尔紫を 新明野系小ナと秋
まじり^レさ^レぎ^レひ^レか^レを^レれ^レ秋^ノ光^カ也
ふれのう^レく^レも^レ月^ノ光^カ也
又ぬぐい^レ水^ノは^レ花^ノを^レて^レハ^レま^レあ^レり^レお^レり

まじり^レや^レ雪^ノ波^ノを^レて^レ南^ノ谷

羽黒山の南谷をその明と薫風自南來殿閣生微涼
しつる^レより^レが^レ吟^レ一^レ也^ハあ^レる^レあ^レし^レ句^ノ中^ニは^レ風^ノの^レ字
と包^レたる^レ波^ノる^レ一^レ

山一尾し動き入るや夏に委

小督屋委少の作し女師花と氣し女は若しこころき
ふり物珍小山し文堂れ前又動き出さるやうよめん
こころこ又若し色集よ委初りて二韓のくひきおはる
よききこころ是らの初と一物しこ海風の波あよ形容も
あし

うき船しや舟れもく成る人の果

小督屋委少の作し女師花と氣し女は若しこころき

かしや竹のあし他まう舟れよハ眼前體く小督の局は筆
午家物語よ委し又南郭集小督詞あり

古今集小物思ひきる船いこき船文子とんこころき

今又舟にあしこころし竹の子は

那恒

こころし志あれたせはあしこころ

庭の實き飛遊よこころの路

庭し海みさこころいひこころ花宗祇のおしよ白し
神去あし燈籠集よ宗祇法師

園地一々暮し暮きらみさか哉

芳徳園園一々下の山寺千婦の笑と

ん〜吟〜あ〜

梅丸日泊船向選種林等よこさう試みるふ作るを能く
着代海崎一々を記のまれふ所を記の園と書き能く
路へ出るよ必書板よ〜る之ありまら板あまハ海坂しふ記
在井寺小通き所を板ふ宗徳の芳徳此園とて暮れ笑と
ん〜板の二ヶ所の名所とて心合とて書き〜る宗
徳と記州の人あゆ〜る代と〜いひ〜るは即ち

のふれ事し別々暮し暮みる〜る花も〜るふ板後板
是のふれ事し〜る〜る〜る比〜る能く書き〜る
る暮〜るのみ板ふ〜る^海〜る板り上人の吟〜る

花の〜る〜る〜る古き板も〜る
蚶満寺の〜る〜る〜る板と浸る〜る
〜る〜る〜る

夕晴やさう〜るに海む波の氣

赤冊子日記句ハ古分とてあま〜る〜る〜る
梅凡日家渡西行板〜るの〜る蚶満寺ハ干満板寺〜る

亦蚌浮かし偲るありし 西上人歌小

蚌浮のさくさくき波は埋れし

花れくへあく 巻れつるみ

杉雨日暮波のあは月と賞しきるなるア一丸日杉雨が
 影と月しえさる物と波と浸るるし橋の影の波さる
 けし浸るるしとわく浪若橋の影は波のあはるる月影橋の
 花し鳥しつるる夕時一息の星さるあは海つるる影
 風さるア一又若二字ゆふとつるる一音絶し俗ふ若字
 と来る非く 徐子淵夜泊庐山詩風緊浪花生

古今の波の花はあはるる又句集は夕時一息の星さるあは海つるる影

まろぶーや多解の徳み出つるん

やハ称嘆のやと若年のま刺ハ離の自れ多解の徳よあは
 れるあ耶ゆふやハけし此句あはるる暮を太くあはるる歌
 しえを嗟嘆のやと太解志るる一浪 松冊とふまは
 しふぬ人れとそきたるまきさるるすやと艶ある歌
 の蓋よまきさるる是海をぶらまきさるるあはるる水
 出る人まき花や除やしきく日七

我うらなはるるをきく言 后言

季子吟日ふ人の薬をよきと云や陰にらう一細工の
とくは年としの目しはあさ我ふと云く一と刺をよきと云
るこの古戯ふるまひしはるる一と云ふ及ふと調しらべと云ふ薬くすりの

目めのうらなはるる言やあささう五月不ふ

端去はたよ言根の園う越へく一あさく一と物種ものしづはあさく一と云ふ
まはさ月の海うみのうらなはるる言やあささう

明あき志しの如ごとく山やまを不ふ二の夜よのうらなはるる言

かたははるる言やあささう

若わか二季よはるるを五月不ふ二と云ふと云く一と云ふけのあさく
言やあささう

一る言く一我と給ふる言はるる

赤冊子あかの目めを向むく一先まに夏なつはるる言く一我と給ふる言はるる
く一と云ふあささく梅うめ丸まるの初はつ景けいは古ふる雅みやび解げし再また景けいは古ふる雅みやび
小こ枯こ野ののあさく枯こ野のの淋しみく言はるる言はるるの思おもはるる
如ごとく一あささう一季よ子こ吟ぎんの言ことば

一僕しやくくわくくまうん哉

世の翻素あはれを身小換骨の妙をさるる枯竹ハハ
まの淋しこの郭を出入 何仲黙詩 行人三月盡
獨馬万山中 二季狂翁の身世中を及く

源一とび給は寫一くう 漢城北井

源一とび給は寫一くう 漢城北井
源一とび給は寫一くう 漢城北井
源一とび給は寫一くう 漢城北井
源一とび給は寫一くう 漢城北井
源一とび給は寫一くう 漢城北井

五月由よがくまぬものや 瀬田の橋

其角曰世稻の念大く公所は海ひく矢判の橋
中(さるや)長橋の天ようる機方多一橋に限る
新(さる)一(京大津あり)歩(信る)去(目)が(湖)北(水)
は(さる)五月(自)とい(る)海(明)後(一)面(ま)を(水)
接(天)と(ん)八(景)と(し)ち(一)お(ろ)各(一)橋(と)ん(身)と(る)
時(と)い(ひ)小(と)い(ひ)一(句)と(は)る(る)京(物)の(あ)る(る)場(と)い(つ)
及(ぬ)ま(や)又(素)の(み)ま(の)あ(つ)つ(つ)つ(つ)鼓(音)者(有)此(歌)

苗堀

二十七

ひろく海——又支考同云

宗形中唐書孫の世にや一筆

亦舟子日各句淵明とくく前云ある始ひる
の書やと中れ七ある梅丸日け句ハ顛倒藏尾の句は
と晋書陶潛傳曰潛嘗言夏月虚閑高卧北窓
之下清風颯至自謂羲皇上人くく我を空獵
已上の人くくつとく諸文。点誤くある凡今段え又
簞ハ升筵あゆくく言の書は自終とくく一再考

唐字と抜ききくく句の中よ是段念然とく

佐和北中山とく

今下形くく山に在るの下す

くくくく又あゆくくくく

家集

今下ありきとくくや北中山

西銘

今これ翻用はる

又月北雨を北録ハ川とく

古雅神々許六日連儂の境を志くぬ人多く一に六五
 日由ハ儂言て五月の雨とハ一連儂を以て花一色おて儂
 ハ准しと云くハ一掃丸曰古雅神々元より詩法和歌
 詠と云く近體タイと云くも有る事あり、極雁ハ詩詠と和
 歌詠と兼ふつゝ法海とハ所合の曲と序とやと云く詠
 又自をあらしハつゞきの詠と用也つゞきし不の也を
 又詠ハ儂言と云く詠ハ一加又許六詠誠あり況や世
 連歌小接しと初筆此つゞきだ先あること既又原日多き水
 と云く又詩詠方流能くみ水と用まは則化しと儂言

と云く辟如_下治鐵成器決氷爲潮也或曰五月は中
 と云く此字解つてつゞきハ雨の五月ハ儂まハ働て新
 つゞき云茂蘭曰五月の雨と云く雨が日なり雨ハ五月は首
 つゞきは是日從の辨てそ人此句は花の境や原ふあい
 是邊は葉あつたり既解目花ハ山とハみ海ハ一云ありぬ
 山ありて花ハ野とハみつゞきはみありぬ野ふら連を
 九日古人も此花は原と云くつゞきは野といふ
 云ありて之ハ字設置べし又道理ありが也(あり)

紗や我らまの衣もあつらひ

茂蘭曰古今、序小文屋、康秀の哥のよ句に商人の
ま衣もあつらひとある付、や梅丸曰、集、原の羽
はひと、はひと、是也云云、云曙抄小夏虫、色と、子
釋、一、桃花翠葉小裏あさす、一、此、思、と、原、此
羽色と、い、え、う、と、影、を、や、丸、探、又、旅、新、此、お、く、夏、衣
と、り、ひ、は、ひ、と、謝、礼、の、吟、あ、る、一、

夕小し朔おしつくと瓜は花

許六曰云 夫者曰心性定、原と、事、成

を、佳、く、し、つ、あ、く、雅、小、あ、る、非、而、合、の

ふ、あ、く、は、く、く、あ、は、く、は、く、耶

西行

を、佳、の、句、く、存、句、と、ひ、あ、と、と、と、と、此、吟、し、又、曰、は、月、は、異、
月、お、し、瓜、の、花、は、く、あ、く、と、と、夕、鳥、お、し、は、く、と、新、は、く、と、あ、く、
は、く、と、は、恒、又、二、原、の、差、あ、る、ふ、つ、と、と、一、初、の、双、圓、お、し、と、定、
小、句、法、と、も、稱、す、一、梅、丸、曰、双、關、と、は、双、關、ナラフ、夕、負、與、
朝、負、也、夕、ふ、か、お、し、は、く、と、朝、負、お、し、は、く、と、是、堂、の、冬、と、天、小
一、ふ、持、く、原、一、瓜、の、花、一、い、え、く、と、是、句、作、一、影、略、一

現の法を用ひて考が解を漢以て圖を

夕まきく夕魚の花

朝まきく朝魚の花 題

夕あとも朝あとも一は似たり

け二ハハ合依哥地う 夕まきく所さ

蝶蜂法小似く引し彼を一物此上の傷き... 此ま
二物之物のくこれ巧も一法ともし小去尺就す時の
用し

夕影や。影も色く此瓢一う如

今釋此章ヲ分テ爲六初叙古二判古三辨轉用意

四引證五今解六泛引辨ス

第一叙古者許六句疑おそ哉とるる瓢ハ物ハ小
く而ちる千生り也つべしふあまぐ花も一色ハ夕の
やいえるはく影も事おとあるそ 夫も同じ句瓢乃
見樣體ありき或夕影や影もいえるハ夕魚ハ瓢
の實く夏秋ハ影引もそ句信いひさどのれしとてや
此花の夕やわしめくゆべよあまあまやけやハ疑の邪と
か一連流しのみ口合れや又哉とるる事ハ押字控

よれ論多き疑のや小ハ花法とあるア一拾用ハ秋
 ちく句と切アて下にあら成以る處と云くハ句讀切
 して小句き小や又同秋とく句讀と切くも小
 ちかへるも切字小あは

两家二十五條曰傳小夕起や切て秋と押へる處
 下の句ハ秋ハ二字切のぶとくは切て其も秋と
 又切く其れ句と云

系傳曰是成其れ句とする時やち常歎のや切て秋
 疑のつふと秋ハくくの飄くあるしくや也一又亦

然の玩れおと秋れ念とて其のやハ念れや切て秋
 是の或は夕の系れ一色なりし秋も其れ飄くあり
 又すると秋もくくの化あそくは採新とくは秋
 秋り了秋説を尚云

茂蘭曰古今抄小けやハ疑のやとわハ云
 化の説とてハ念のやとて臨時の夫を私案よ亦亦
 五五并し疑のやとてハ同致あて疑の系ハお遠せも亦亦
 亦亦一物の上は慶喜表の次を疑ひ五を并ハ多亦れよ
 小亦一と一ある疑よとす

第一判古者一許六を其れ句とて此解之を臣
 入色への詞とて「死ハ一色」多相對小約とて
 一但一やと疑へんはあふ一 二支考有多
 夫一古既秋の句とて其不可と二之魚の成喜と約
 する不可と三やと疑へんは哉ハ一子所嗟嘆と
 一ハあふ共は不可と四之字ハ押ハ字あると彼が法
 二抱字とて五秋と結前生後ハ詞とて
 家ハ句禮と切る事非之支考義一とて一ハ
 一 三廿五条是れ句とするは又一押字も後ハ

ずまねく引海若波干日月和風と一此字ハ抱字な
 ると押ハ字とて是ハ一非之又今此字にハ字の油也と
 裁の二ハ一況ど一系の波也只圍ハて終止ハ此ハ詞と
 一と一傷ハ一まハ一次 四花雀其れ部ハ一
 五杉雨六暮太有人秋之部ハ一七ハ一
 八ハ一
 茂南判ニ許支義相をよハ一解ハ
 第二辨轉用意者 十古今集ハ 一人ハ
 みハ一

秋ハ色一ハ花ありありと

秋の秋と名は特用なる今秋葉の骨打は菊の特用すべ
く秋花あり緑と白と花の色は赤く流瀉の形は色
く秋より名と心合す秋葉より秋と心合すふかく
のびく秋一と心合す秋葉より秋と心合すふかく
今もや哉と心合す秋葉より秋と心合すふかく
第四引證者凡七部集は菊の議評と秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく

第五自義者夏は夕部は夕部の目もさるぼりう向くと
涼一と心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく
秋葉よと心合す秋葉より秋と心合すふかく

吟すべし一かゝる讀後の考よこそ押字とて直うもつたて去
易就難クや平秋ハトて入りの實は支らん安玩小
一一和之そのまはれ和後とあるは語し又并句は魂ハ
秋も色くくいさるる心也

第六泛引辨者去喃此句小

舎下へけるさね能ふもやこれ内ハ

ゆあへしすくふまま此ハ海哉

云は向ふ手多條くく似たる新と但一は秋のままハ西行
此秋の此まも同くく是切也てやと心もく今此句と

讀後此處あり是和秋くま向く長短緩急の氣と混り
く一しすへし片

夏此物中流中を先て吟るも佳

古今秀歌十首之内

鳴つるる鳥此あまやにちつらん

物初りよ岩地と林の上のま

是よく一特きる能也

真二